新大陸文化史の諸問題
——特に先コロンブス期文化を中心として——

貞　末　堯　司

目　次

1. 序
2. 中・南米高文明地域の編年について
3. オルメカ文化について
4. チャビン文化について
5. 結　語

1. 序

新大陸における先コロンブス期文化に関しては，多くの問題点が残されているが，特にその中でも，時代区分の問題は重要である。即ち，歴史的時間の経過の中の人間文化の問題を考える場合，その編年的な意味と時代区分の正確な把握は，文化の本質を究明する上からも必要不可欠の前提条件でなければならないからである。今までに行われた新大陸の先コロンブス期文化に関する様々な発見や研究によって，スペイン人侵入以前のアメリカ=インディアンの諸文化は，その内容をかなり鮮明にわれわれの前に示してくれるようになったが，南・北両アメリカ大陸という広大な地理的広がりに対して，これをすべてカバーできるような文化的編年，あるいは時代区分が確立されていないのも事実であろう。しかし，地理的条件や民族の相異などを含む広大な地域に関する編年や時代区分は，それを確立すること自体が不可能であって，民族文化発展の個々の側面をとらえ，これを共通する一つの概念に組み込もうとする時代区分的作業は，それ自体行われない方が，むしろよいという意見も逆説的には成り立つのである。

しかし，文化的現象が，相対的に時間的経過のどこに位置づけられるかは，歴史学上の根本的命題であり，このためにも多くの試みがなされてきたのも事実である。このような意味においても，本論では，第一に中・南米のいわゆる高文明地域での文化的編年と時代的区分の問題をとりあげてみた。しかし，この問題は，本質的には旧大陸における先史，原始時代の文化的編年との対比において考えられ，また，その刺激によってうながされているといった面を見逃すことはできない。即ち，旧大陸における旧石器，新石器，青銅器，鉄器時代という，人間の道具の素材を

根幹とした編年に対して，これに相当ないし対応し得るような共通の文化現象をとらえ，新大陸の独自編年を行おうとする作業でもある，といっても過言ではなかろう。しかし，旧大陸に発見される金属器は，文字通り人間生活の根幹をなす道具であったし，社会的，政治的に大きな意味をもった素材であり道具でもあった。つまり，青銅の出現は，多くの国家的なものの成立の前提であったろうし，鉄器は，正に国家や首長国成立の基盤でもあったのである。しかし，このように，社会的，政治的，経済的な意味をもった金属器は，新大陸には存在しなかったのである。存在しなかったものをもって，旧大陸と同様ないしは等質的な思考法に基づいて編年を行うことは，誰もなし得ないことであるため，ここから，新大陸独得の編年観，あるいは時代区分の方法を考えざるを得なくなるのである。

また，オルメカ文化及びチャビン文化の問題をとりあげた理由は，前者が中央アメリカ特にメキシコでの基盤的なしかも初源的な文化の様相をもつこと，同時にオルメカ文化の分布範囲やその基盤的文化の様相は，その後の中央アメリカ文化の形成に，ひじょうに大きな影響力をもったものであることなどが注意されなければならない点からも，新大陸の古代文化史にとって，オルメカ文化の問題点を追求することが必要であったことによる。同様な意味において，南米のアンデス地帯の古代文化にとって，チャビン文化の問題は，極めて重要である。チャビン文化も，オルメカ文化と同じようにアンデスの基盤的文化の諸相をもつものであろう。ある文化の影響力が広範囲な地域に広がり，等質的な文化の諸相が，ある時期，ある地域に知られることはその基盤的な文化自体の追求もさることながら，その文化の歴史的な意味を考えなければならなくなってくる。オルメカ文化がもった中米地帯での影響力とチャビン文化がもった中央アンデス地帯での影響力とは，ひじょうに類似した性格のものであり，なぜこのような文化が，広大な地域に，その影響力を及ぼしていったか，という問題は，新大陸古代文化解明に重要な手がかりを与えるものであるからである。

しかし，オルメカ文化とチャビン文化が，その影響力を及ぼした範囲の中で認められる両文化の発現形態には，必ずしも同一ないし等質的なものが看取されるわけではない。つまり，オルメカ的要素が他の地域で発見され，その影響力の存在が推定されても，それは，オルメカ文化そのものの発現を意味しないのは当然であって，オルメカ文化のいわゆる文化的内容をもったものの発現，オルメカ的「要素」の出現を意味するのである。そして，その場合注意されなければならないことは，土器とか，人形土偶とか，絵画とか，のいわば芸術的作品，更には人間生活に直接関係した道具類の中に，その影響力があったことが発見される点であって，決して，都市，ピラミッド，神殿，宮殿といった巨大な建築物の中には発見されないことである。つまり，オルメカ文化の影響力は，都市的中心地を，あるいはオルメカ信仰の中心地の構築をといった巨大建築物や都市の形成といったようなものではなかったということである。このことは，チャビン文化の影響力とは本質的な相異点として把握されなければならないのである。

一方，チャビン文化は，アンデス地帯に大きな等質的文化の広がりを斉らした原動力であったと考えることができようが，その影響力は，正にチャビン文化それ自体の発現としてつかまえることができる点を注意しなければならない。チャビン=デ=ワンタルのピラミッド神殿に極めて類似した神殿が，アンデス各地に形成され，それが，その地域の一つの文化的総体としての中心地を形成してくるという影響力の大きさは，文字通り絶大であり，オルメカ文化のもつ影響力とは，質的な違いをもつものであった。このような点から考えて，中南米の両地域において，古代文化の本質的な意味を問うための十分な要素をもったオルメカ文化とチャビン文化の問題をとりあげてみたのである。また，オルメカ文化とチャビン文化の問題は，前述の新大陸における編年問題とも深い関係をもって考えられなければならない一面をもっている。というのは旧大陸における編年観と新大陸におけるそれとの相異は，正に等質的文化の広がりを歴史的時間の経過の中でつかまえ，それが相対的にどのような位置にあるかを究明することから出発する点においては，両者は，共通するとしても，等質的文化としてとらえらるべき文化要素は，前述の如く新，旧両大陸では，まったく異ったものである。したがって，新大陸では青銅とか鉄とかの道具の素材を問題とするよりは，他の要素を問題としなければならないのである。この場合，オルメカ文化の内容，チャビン文化の内容といったものが，大きな意味をもってくるのは当然で，例えば，芸術様式とか，信仰形態とか，人間の精神生活上のパターンが，その当時のある文化の段階に象徴的である場合には，そのパターンをもって，編年基準にすることができるのではないかと考えるのである。このような点から，オルメカ文化，チャビン文化のもつ内容は，新大陸の編年問題の重要な足がかりを提供することになるのである。

中・南米先コロンブス期文化史上，重要と考えられる諸問題の中から，本稿では，以上のように三つのテーマを選んで述べてみたい。

2.　中・南米高文明地域の編年について

16世紀の初頭，スペイン人がアメリカ大陸に征服の足跡を印した頃，大陸原住民人口は約1,500万人と推定されている。しかも，その約3分の2にあたる人口がいわゆる核地帯アメリカ(Nuclear America)[1]とよばれる地域に住み，残りが北極圏から南米南端のティエラ=デル=フェゴ(Tierra del Fuego)島に至る残余の地域に住んでいたと推定されている[2)3)]。このような異常とも思える人口の偏在には，一つの理由が存在した。それは，人口が集中した地域，つまり核地帯アメリカには，農耕に基づく高度文明成立の基盤が存在し，多数の人口を養い得る礎地があったからである。したがって，16世紀初頭のスペイン人の侵入時においても，核地帯アメリカを除く他の地域では，文明とよばれるものは，遂に見出されることなく，ヨーロッパ人の支配下に服さざ

るを得なかった地域も存在したのである。例えば，北アメリカ大陸の北極圏では，エスキモーの例に見られるように，狩猟，漁撈による生活が細々と営まれていたし，南アメリカ大陸の南部では，太平洋岸の砂漠地帯で極めて小規模な砂漠農耕村落が営まれ，アンデスを越えた東側の広大なパンパ（草原）と亜寒帯林の中では，狩猟，採集者の漂泊的生活が営まれていたにすぎないのである。この他にも広大なアマゾン熱帯雨林では，根菜を主とする初期農耕と採集，狩猟の生活が営まれており，新大陸には，明確に文化が集中的に発展した地域と長い時間の経過にも拘らず，文化が停滞した地域との二つのきわ立った様相を見ることができるのである。しかも，このような発展と停滞との地域的変差の中で，文化発展の著しい地域をとってみても，その文化の段階的かつ時間的な位置づけが，旧大陸の文明の発展のそれに比べて著しくおくれた様相をもっている点は，新大陸の先史，原始の編年的思考をより一層複雑にしているのである。換言すれば，旧大陸の文明の発生が，オリエントの肥沃な三ヵ月地帯を中心として前6～5000年頃に見られたのに対して，新大陸の最も進んだ文明圏でも，旧大陸オリエント地域の文明の発展期に相当する段階に到達するまでには，更に約4000年近くの時間が必要であったのである。つまり，新大陸では前2000年頃と推定される時期に初めて，定住的農耕村落が出現するという事態があるのである。

このような新大陸原住民文化の特性に関して，どのような時代的区分を行うかに関しては，多くの試みがなされてきたが，その中でも，一つの大きな考え方を注意しなければならない。

それは，旧大陸の文明の発生，発展に適用される概念にやや近い考え方で，新大陸，特に核地帯アメリカの文化の発展を五つの段階に区分する考え方である。この五段階とは，石期（Lithic），古期（Archaic），形成期（Formative），古典期（Classic），後古典期（Postclassic）の五つであって，各段階に，歴史的期間（Period）のいわば時代区分的な意味を持たせようとするものである。この考え方は，いうまでもなく，先史，原史文化を考古学的質料によって，発展段階的にとらえ，同時に，物的資料の中に人間文化の発展の法則を見ようとする旧大陸的編年思考の影響があるのである[4)5)]。

さて，この五段階の各段階は，どのように解釈されているかを述べよう。まず，最初の段階である石期の概念は，次のように考えることができよう。

石期の初期は，ホモ=サピエンスのアメリカ大陸への渡来の時期で，ベーリング海峡を渡渉した類蒙古人の一団が，アメリカ大陸に足跡を印した時期であろう[6)]。しかし，この初期の段階の考古学的質料は，極めて少なく最古の前4万年頃と考えられる遺物も北アメリカから発見されてはいるが，正確に学会の承認を得られているわけではない。しかし，ルイズヴィユ（Lewsville）[7)]やラ=ホジャ（La Jolla）[8)]，トゥーレ=スプリング（Tule Spring）[9)]などの石器や炉址の中から発見された遺物の年代は，石期の初期の段階を物語るものと考えることができよう。しかし，石期は，ひじょうに長い期間をもつものであって，北アメリカで前15000年から前8000～7000年頃になると，にわかに尖頭石器が出現してくる[10)]。この頃では，明かに巨大獣狩猟による生活者が，北

米大陸の各地に広がったと考えられ，更にアメリカ大陸独得な有溝尖頭器（Fluted Point）が出現すると，更に一段と進んだ狩猟生活が営まれるようになったと考えることができよう[11]。

しかし，この石期段階は，北米を中心として広く南，北両アメリカ大陸に発見されるものであり，北はアラスカから，南はマジェラン海峡に至るまで，いわゆる尖頭石器文化の系列の存在が確認されている。勿論地域により，その文化のもっている内容は異っているといっても，石期段階という狩猟，採集経済に基づいた生活が営まれていたのも事実であろう。例えば，メキシコのテキスキアック（Tequixquiac）[12]，テペスパン（Tepexpan）[13]，バルセキージョ（Valsequillo）[14]などの諸遺跡及びホンデュラスのエスペランサ（Esperanza），南米，ベネズエラのエル=ホーボ（El Jobo）[15]，エル=マンサニージョ（El Manzanillo）エクアドルのエル=インガ（El Inga）[16]，ペルーのラウリコチャ（Lauricocha）[17]，ボリビアのヴィスカッチャニ（Viscachani）[18]，北西アルゼンチンのアンパハンゴ（Ampajango），チリーのパイアイケ（Palli Aike），フエイエス（Fellis）[19]洞窟などは，いずれも，中・南米諸地域に発見された石期段階の有数な遺跡であるが，これらは，いずれもベーリング海峡からの渡来者達が石期の段階に生活を営んだ場所であり，彼等が渡来してから，南米の南端に到達するまでの時間的経過を示している遺跡でもある。

しかし，これら諸遺跡によって示される文化の内容は，必ずしも定まったものではなく尖頭器類を主体とする文化であっても，石器製作技術上からも，またその種類の上からも，かなりの変化が認められ，北から南への移動の過程と時間的経過の上で大きな変化がおこったことが推定されるのである。また，新大陸の石期段階は，ウイスコンシン氷河の消長と大きな関係をもって考えられなければならないが[20]，いずれにしても石器は，旧大陸で考えられている旧石器時代後期に対応する段階という想定を否定することはできない。ヨーロッパのアルプス氷河の編年を軸に推定された旧石器時代の概念は，新大陸では化石現生人類の文化，つまり旧石器時代後期の文化としての石期段階という概念で把握されている点を否定することはできないのである。

しかし，石期の時間的位置は，旧大陸の旧石器時代後期のそれとは，大いに異った内容をもつもので，前8000年頃から前4000年頃までは，尖頭石器を中心とした文化段階として考えられており，概念的な把握の仕方も歴史的時間という観点からは，旧大陸のそれとは一致しない点を注意しなければならない[21]。

次に古期の段階についての概念を見てみると，この段階は，文化的には石期の内容をもつものであるが，食料獲得法の上で，初めて大きな変化が現われ始めた段階ともいえるのである。巨大獣狩猟の生活は次第に終末に向い，狩猟の対象は，小動物に変化する。つまり，猿，鹿，いたちなどの小動物が捕獲される一方，漁撈が重要な役割を担ってくる。このような事態は，恐らく気候条件の甚しい変化によっておこされたものと考えることができるが，考古学的遺物の中に釣針，漁網，前述の小動物の骨などが多く発見されることによって，その変化の内容を推定することができるのである。この食料獲得法の変化は，更に進展し，狩猟，採集，漁撈といった天恵依存の

生活は次第に変貌をとげ，古期の中期以降からは，植物の種子，根茎類の採集などがひじょうに重要な意味をもってくるようになった。そして，それは極めて原始的な農耕の開始への口火ともなったようである。例えば，メキシコ，タマウリーパス州の洞窟内に発見される南瓜，瓢箪，豆などの遺物は，これらのうちの一部が，前6～5000年頃に既に栽培化されていたことを物語っている[22]。また，前5000年から前3000年頃になると石臼，石杵[23]の存在が明確になり，種子をはじめ，多くの根茎類は，すりつぶして食用に供されていた事実がある。そして，前2500年頃になって遂に，とうもろこしが出現してくるのである。とうもろこしに関しては，野生種か栽培種かに関して多くの疑問点もあるが，いずれにしても効率のよい栽培植物が，人間の生活に大きな変化を斉らしたことを物語っている。これと同じような現象は，南米のアンデス地帯においても見られるところである。コロンビアのプエルト=オミガ（Puerto Omiga）やエクアドルのバルディビア（Valdivia）では，土器の製作が盛んになるとともに，豆，南瓜，瓢箪などの栽培が開始され，原始的農耕が，明らかに定着した事実を物語っている[24][25]。

こうした食料獲得法の変化は，人間の文化の上では，一つの大きな期時を画する出来事であり，農耕を基盤として，人類は文明への道を歩み始めるともいわれているのである。また，栽培植物によって食料がある程度生産される形態が発生するとともに，技術的な革新が行われたのも事実で，土器が作られるようになるともに，織物技術も進歩してくる。つまり，農耕的な静的社会の形成につれて，人間の知的労働が進み，高度の技術が習得されて，その結果大量の土器や各種の織物，編物などが製作されてくるようになるのである。しかし，古期の段階は，本質的には，まだ狩猟，採集，漁撈の段階であり，人々の生活が更に大きな変化をうけるためには，もう一段階上への発展をまたねばならなかったのである。

形成期段階という観念は，古期における原始農耕が更に発展し，食料獲得が植物栽培による生産という形態によって行われ，社会的に安定した経済状態が出現し，しかも，定住農耕村落が出現する段階を本質としている。しかし，形成期は，その初期の頃から終末，つまり文明への入口が出現するまでに，普通三つの時期に分けて考えられている。しかも，形成期の文化的内容は，石期，古期の段階に比し，かなり複雑であり，土器，織物などの工芸品の製作がおこるとともに，文様技法や墳墓の構築，更には信仰形態を示す宗教的遺構，政治的，経済的な中心ともなり得るような人口集密地といったものが形成されてくるのもこの段階の特長である。

形成期段階は，定住農耕村落の形成を始め人間の精神生活を推定できる宗教的遺構すら出現するので，しばしば，それは，次の古典期への懸橋的役割をもった段階とも考えることができよう。しかも，形成期段階は，年代的には，前2000年頃から紀元前後頃とも考えられ，その間には，多くの文化的内容が認められるとしても，総体的には，次の発展が準備され，古典期への開花のための母胎であったとも解釈できるのである。

この期の遺跡は，メキシコ中央高原では，エル=アルボリージョ（El Arbolillo）[26]，サカテンコ

(Zacatenco)，トラティルコ (Tlatilco)[28]，クイクイルコ (Cuicuilco)[29]，ラ=ベンタ (La Venta)[30]，トレス=サポテス (Tres Zapotes)[31]といった代表的遺跡を数えることができるが，南アメリカでも，ワカ=プリエタ (Huaca Prieta)[32]，チャビン=デ=ワンタル (Chavín de Huantar)[33]，コトシュ (Kotosh)[34]などの遺跡をあげることができよう。

形成期段階の後期におこってくる文化は，文字通り古典期への準備の段階であり，同時に農業生産の高まりによって人口増加，人口の集中化，都市的中心の形成，神殿，その他の遺構に認められるような宗教都市的中心の形成といった文明への開花期の前段階であった。このような意味で古典期は，核地域アメリカに開花した文明の段階と呼ばれてもいい内容をもつものであったし，形成期を基盤として，形成期のエネルギーが文明という形で集約され，そして発展していった段階ともいえるのである。

メソアメリカの高文明古典期は，中央高原文明とマヤ地域文明とに集約されると考えても差し支えなかろう。しかし，メソアメリカの古典期には，三つの大きな系譜が存在することも見逃すことができない。一つは，トラティルコ=オルメカからテオティワカン (Teotihuacan)[35]，テューラ (Tula)，文明に至るメキシコ中央高原系文明，他は，ラ=ベンタ=オルメカ系から低地マヤ系文明，そして，ラ=ベンタ=オルメカ系からモンテ=アルバン (Monte Alban)[36]，ミトラ (Mitla) に代表されるサポテカ (Zapotec) 系文明の三つである。これら三つの系列には，いずれもオルメカ文化が一つの基盤的要素となっているのを知ることができるが，このオルメカ文化に関しては，後述の如く，古典文明への重要な手がかりを与えてくれるものであった[37]。

また，南米における古典期文明は，ペルーの北部海岸と南部海岸で，それぞれほぼ同時期に発現した。北部海岸のモチーカ (Moche) 文明は，太陽，月の両ピラミッド神殿をもつ壮大な都市を中心とするものであるが，明らかにチャビン文化の後継者的要素をもち，莫大な量の土器を生産し，高度に集約化され，組織化された灌漑農業によって，強力な農業生産力の裏づけのもとに発展した文明であった。ここでは，金属工芸や宝石細工など工芸的技術の発展が認められ，政治的，宗教的な面に強い身分的社会が構成されていたことを知ることができる[38]。一方，南海岸のナスカ (Nazca) 文明は，ペルーのイカ (Ica) 谷からリオ=グランデ (Rio Grande) 河谷にいたる狭い地域に開花した古典文明である。ナスカ文明は，明かにパラカス=カベルナス (Paracas Cavernas)[39]とパラカス=ネクロポリス (Paracas Necropolis)[40]の文化を継承し，同時にそれを強力に発展させたものとして考えることができよう。砂漠の中に発展した文明であるにも拘らず，その内容は多岐にわたり，巨大な地上絵や多彩色土器，黄金細工品などは，新大陸文明の特殊性を物語っているものである。また，中央アンデスのチチカカ湖の南岸に中心をもつティアワナコ (Tiahuanaco)[41] 文明は，前二者の文明と並んでアンデス古典文明の代表であるが，海抜 3800 m の高地に開花した個性豊かなこの文明は，荘麗な石彫や太陽の門をもつ神殿，巨石彫刻，ビラコチャ神信仰を示す祭祀遺跡など，特色ある文明である。ティアワナコ文明は，800 年頃から急激

に発展し，ほぼアンデス全域をその影響下におくようになった。この文明の異常なまでの発展が，なぜおこったのかについては，軍事的支配が存在したとする説が現在有力である[42]。

核地帯アメリカにおける古典期文明は，次の後古典期へと発展するが，後古典期は，前期の地方国家形成段階と後期の統一帝国の成立といった政治的組成の中に一つの大きな特色をもっていたものと考えることができよう。中央アメリカのマヤ地域においては，低地マヤ文明の発展が見られ，ユカタン半島を中心として，マヤパン (Mayapan)，ウシュマル (Uxmal)，チチエン=イッツア (Chichen Itza) などの一大メガロポリスが形成され，宗教的，政治的都市国家としての繁栄が認められる[43]。一方，メキシコ中央高原では，アステカ族による統一的国家が出現し，スペイン人の侵入まで高原地帯は，アステカ帝国の強力な軍国的支配によって統一されたのである。このような現象は，南米においても認められ，ティアワナコ文明が全アンデスを支配した後12世紀頃から，地方都市国家群の成立が目立ち，モチーカ文明の後継者としてのチムー (Chimú) 王国の成立，チャンカイ (Chancay)，イカ，ワンカ (Huanca) などの諸王国の形成など，後古典期段階前期の様相が認められる。しかも，これらの王国は，独立国家的な版図をもつのは勿論，文化的にも一貫した様式をもち，等質的かつ自律性の強い文化要素をその版図内にうえつけていっているのである。このような地方的色彩の強い諸王国の成立した後古典期前期も，クスコを中心としておこったインカ (Inca) による全アンデスの統一によって，北はエクアドルから南はチリーのマウレ川に至る広大な版図が形成され，後古典期後期文化は，いわゆるインカ文明一色にぬりつぶされたわけである[44]。

以上のように，五段階説の各段階について，長い説明を加えたのは，これら五段階の各段階が，旧大陸で行われている時代区分と同様な意味をもつものであることを説明したかったからである。前述の如く，新大陸における文化史の中で，著しく文化的発展の認められる地域と長い停滞を経て，遂に文明という段階に到達し得なかった地域とがあるが，石期，古期の段階は，新大陸全域について，そのような文化内容をもった一つの段階，あるいは時期といったものとして把握することができる性格のものであろう。しかし，次の形成期段階，つまり，定住農耕村落が形成され，食料生産が，とうもろこしを主体とする栽培植物に依存し，文化的にも明確に一つの段階として確認される様相をもつようになってくる段階では，必ずしも新大陸全域について，この段階をあてはめることができなくなってくる。特にアマゾン熱帯雨林地帯やアルゼンチンのパンパやチリーのアンデス地帯，西砂漠地帯，北米ミシシッピー平原などには，バンド的，あるいは族長的な集団の狩猟，採集を主とした初期農耕民の存在が知られているだけであり，定住的農耕社会の形成は，必ずしも明確ではない。このことは，同時に，このような地域では，古典期文明が起り得なかったし，後古典期段階に至っては，まったく考えられないのである。したがって，五段階説は，人間社会進化の一つの典型が，核地帯アメリカを中心として発現したことを論証したものであって，残余の地域に対する社会的進化，社会発展の様相は，ある意味で，まったく違った方向

をとったか，また，まったく別の段階を想定せざるを得ないのではないかと考えられるのである。しかし，問題は，この五段階説によって新大陸の高文明地帯の編年を考えたにしても，なお，多くの疑問点が残ることである。

16世紀初頭のスペイン人侵入時，新大陸の人口の約3分の2は，核地帯アメリカに居住していたと考えられていることは，前述したが，人口の増大は，同時に領土的規模と深い関係をもつものである。つまり，大きな人口を養い得るための最も良い組織は，バンドよりは部族，部族よりは首長国，首長国よりは国家という方式を考えることができよう[45]。核地帯アメリカにおける大多数の人口は，メキシコ中央高原，マヤ地域，そして中央アンデスを主地域として存在していたことは明瞭であるが，この地域は，古典期文明から更に後古典期段階の国家を成立させた地域でもあったのである。このことは，文明への発展と文化の停滞が，どのようにしておこったのかを物語っているとも考えられる。換言すれば，文化が早くから発生，発展し，それが巨大な人口を最もよく養い得る組織としての国家へと発展した地域と石期，古期といった同じような段階の文化の内容を持ちながらも，何故に文化発展の遅滞が生じ，停滞が続いて，極めて原始的ともいえる段階のまま留まってしまった地域とが生じたのか，という問題に対する解答の鍵が，この人口問題の追求の中にあるのではないか，ということである。しかし，このような問題について，根本的に重要なことは，ある文化領域は，高度文明に達したのに，なぜある文化領域は低迷し，停滞した文化で終ったのかを問うことではない。根本問題は，なぜある領域では文明への発展のテンポが速くて，他の地域では遅いのか，ということを追求することでなければならない，ということである。つまり，人間社会は，時間的経過によって進歩し，発展を続けるものであり，進歩とか，発展とかという問題は，極めて相対的な問題でしかないからである。ただ，どうして，そのような時間的遅速が生じたのかが，追求さるべき本質的な問題なのである。

このような観点から，新大陸における形成期段階という概念は，ひじょうに重要な意味をもってくる。新大陸に初期農耕がおこった場所は，必ずしも一箇所ではない。萌芽的農耕が存在したとも考えられる資料は，少なくないが，この萌芽的農耕が，次の定住的農耕村落を形成するまでに発展したか，しなかったかに問題の核心が存在するのであろう。バンド社会は，採集，狩猟社会的要素を強くもつが，部族的集団になると農耕と密接に関連をもってくると考えられている。農耕が行われるようになっても，それが集約化され，大規模化されてくるためには，定住という人間の集団生活様式が前提条件になってくる。定住を伴わない農耕は，園芸的であり，その生産性は，ひじょうに疑問である。このように見てくると農業の生産性に裏づけられた地域が，多数の人口を養い得る唯一の場所であり，集約化された農業と同時に大規模生産を開始する素地は，正に定住形態をとった村落の形成が前提条件となってくるのである。メキシコのテワカン谷の調査による成果は，定住農耕村落がメキシコ高地に開始され，その生産性の高い栽培植物は，周辺地域に斉らされ，第二，第三の定住農耕村落を形成していったことを物語っている[46]。

このように見てくると核地帯アメリカの文化段階において定住を住居形式とし，後背地に農耕地をもった領域が考古学的，民族学的，生態学的に解明されればされる程，文化段階のもつ本質的な問題が解明され得るのである。文明の発展の遅速の問題も定住農耕村落の形成の速度や，その中で行われた農耕の生産性に深い関連をもつ問題であって，新大陸のとうもろこし農業がもつ根源的命題も実にこの点にあると考えられるのである。

しかし，定住農耕村落の形成が，文明への発展の礎石であるといっても，古典期段階に到達し得た地域は，マヤ地域，メキシコ高原地帯，アンデスのモチーカ，ナスカ文明といった地域に限られている。古典期段階においても，農業は経済的には勿論，政治的，社会的に重要な役割を果す点は，変わりないのである。古典期農業は，単なる定住農耕村落という段階に留まったのではなく，更に組織化され，集約化されていったことを物語るものであった。それは，灌漑という大土木工事を伴う，組織化された人工の水路によって管理的灌漑農業ともいえる性格のものであった。つまり，農業生産を完全にコントロールできる体制をつくり，その組織と管理の上に農業生産性を把握し得た段階が，文明という名で呼ばれる古典期の段階であると解釈したいのである。古典期段階における農業は，次の後古典期段階では，更に一層集約化され，統制化され，農民の政治的掌握がなされ，例えばユカタンのマヤ新帝国の農民たちは，正確なマヤ暦によって，すべて統制され，播種から収穫まで，暦のリズムによってコントロールされていったのである。同様にアンデス地帯に成立したインカ帝国では，絶対的皇帝権が農民の統制と，農業生産の把握者であったわけで，核地帯アメリカにおいて，農業のもつ意味は，極めて大きかったといわざるを得ないのである。

以上のように核地帯アメリカの五段階説の根本には，農耕問題を重要な要素とした様々な問題が存在しており，したがって，五段階説の説く文化内容が，仮りに農耕問題を度外視して個々の文化表徴としてのみ説かれている場合には，それは，大きな誤りをおかした段階論であるといわねばならない。発見され，発掘された遺跡の文化的意味の究極にあるものは，人間がいかなる食料獲得法を実行していったかを判明させることであらねばならない。換言すれば，いかなる編年的役割をも果し得ない発見や発掘は，無価値であるともいえるのである。同様に，文化的発展の遅速が，なぜおこってくるのかの問題，したがって，高文明への発展が認められる地帯と認められないまま停滞した地帯の問題も，根源的には，定住農耕村落が形成される条件の遅速の問題でもあるのであり，形式された以後の定住農耕村落の発展形態が，どのようなものであったかの問題でもあると考えるのである。

3.　オルメカ文化について

オルメカ文化とは，メキシコ湾岸のベラクルスを中心とする周辺地域に広がった特異なメキシコ湾岸の古代文化であるが，ベラクルス周辺は，ワステカ（Huaxtec），トトナカ（Totonac），オルメカ族などの数種族が，かつて居住していた地域でもあり，古くから同地域の文化の特殊性が問題となっていた。オルメカとは，もともと「ゴムの国の人」の意であるが，ベラクルス周辺地帯は，先コロンブス期からゴム原料の採取地として有名であり，採取されたゴムは，メキシコの広い地域にわたって交易されていたものと考えられている。このような地におこったオルメカ文化は，ラ=ベンタ，トレス=サポテス，サン=ロレンソ，リオ=チキト（Rio Chiquito）などの諸遺跡に見ることができるように，特異な文化的表徴をもっている。それは，翡翠や蛇紋岩の石偶を主とするものであるが，豹と人間との複合モチーフをもち，部厚くまくれあがった口唇やニグロ的風貌をもっていて，中央アメリカのその他の地で発見される石偶や石彫とは，まったく趣を異にするものである。また，点と棒による数字表記をもった石碑やピラミッド神殿，高さ2.5mに及ぶ巨岩の人頭像など特異な石彫文化が認められる[47]。

オルメカ文化は，単にベラクルス周辺地域に見られるだけでなく，その要素は，形成期後半を通して，メソアメリカの広い地域にわたって発見されるという事実が，オルメカ問題を考古学的に著名にした理由でもあるが，オルメカ的要素は，西はベラクルスからタバスコ州にかけて，北は，プエブラ，モレロス，ゲレロの各州を経て中央メキシコ高原へ，更に，この地域から南の方へは，オハカ，チァパスの各州に広がり，一部は，ガテマラの太平洋斜面へ，そしてエル=サルバドルの一部へと広がって発見されるのである。しかも，オルメカ的要素は，ある場合には，オルメカそれ自体の特長をもって表現される場合もあるが，しばしば変形された様式をもって表わされ，小さな器物に特によくその特長が表現される場合が多いのである。例えば，土偶とか翡翠の装飾品，石偶，土器などであるが，決して巨大な建造物とか，巨石人頭像そのものといったような表出が行われない点に特長が認められるのである。

メキシコ中央高度における形成期前，中期の調査は，トラティルコ，サカテンコ，エル=アルボリージョなどの遺跡で精力的に行われたが，これらの諸遺跡からは，文字通りオルメカ的要素をもつ土偶や土器などが多数発見された。このようなことから，オルメカ文化の原郷問題がおこり，央央高原地帯にオルメカ文化の発生地が存在し，それは，逆にメキシコ湾岸のベラクルス周辺地域へと移植されたと考えられた。しかし，ラ=ベンタの典型的なオルメカ文化が，メキシコ中央高原のトラティルコのオルメカ的要素より，年代的に新しいということが確実でない現在，この考え方も正当ではないのである[48]。

オルメカ文化は，このように，メキシコ中央高原の形成期後期文化と深い関係をもっているが，更にオルメカの地で発見された点と棒の数字表記は，マヤの数学表記と同じであり，この点から，マヤの数字の源流をオルメカ文化に求める考え方も根強く残っているのである。同様に，中央高原を経て，オハカのモンテ=アルバンにおいても点と棒の数字表記が現われ，その他の石彫や巨岩上の浮彫彫刻にも正にオルメカ様式といったものの表出が認められるところから，オルメカ文化の基盤的な役割といったようなことが多くの注意を集めたのである[49)50)]。

オルメカ文化は，メソアメリカの形成期の前800年頃から以降の文化にとって，基本的な命題をなげかけるようになり，現時点での最重要な考古学上の問題を提供しているのである。オルメカ文化の問題は，にわかに解決されるような簡単な性質のものではないにしても，オルメカ文化は，メソアメリカの先コロンブス期の基盤的文化を形成していったものと考えることができる。オルメカ文化を基盤とし，その影響力のもとにメキシコ中央高原文化は形成されていったわけで，トラティルコ文化のオルメカ文化との結びつきは，メソアメリカ考古学の重要なテーマであるし，マヤ文明の起源に対しても，多くの疑問や議論があるが，オルメカ文化を度外視しては，解決のつけられる問題ではない。いわば，オルメカ文化は，メソアメリカ文化史上の根源に横たわる問題であるといえる。

4. チャビン文化について

メソアメリカにおけるオルメカ文化の問題と同様な意味で，南アメリカのアンデス地帯，それもペルーを中心とする北部から中部アンデスにかけて，チャビン文化の問題がある。

チャビン文化は，チャビン=デ=ワンタルを中心として，アンデス高地一帯に形成期の一時期にわたって，広く分布した特異な文化様式を指すのであるが，その文化の中心命題は，宗教的な信仰形態にあると考えてもよかろう。中央アンデスにおける形成期の中期の段階にチャビン=スタイルとよばれる文化様式がペルーの北はピウラ谷から，南はイカ谷に至る広い地域の海岸と山岳地帯をおおったのである。チャビン様式は，石造のピラミッド神殿，鐙型土器，黄金細工，石彫，織物などに明確に認められるものであるが，特に猫科獣信仰の存在を想定させる要素が強く残されている。このチャビン猫神（フェリーノ）は，しばしば擬人化される場合が多く，牙をもつ人間といった印象をもつ彫刻品も発見されるが，一般的に猫科獣の牙や頭部が抽象化されて表現され，神殿の壁の装飾，土器文様，骨角器，織物，黄金細工などにふんだんにとり入れられている[51)]。

アンデス地帯の形成期におけるチャビン様式の広がりは，単なるスタイルだけの広がりではなかった。それは，しばしば土器その物やチャビン式神殿を各地に建立するといった積極的な意思の伝播でもあった。このことは，前述のメソアメリカのオルメカ様式が，いわばオルメカ=スタ

イルとして広がり，オルメカ文化その物の伝播といった様相をとらなかったのと，好対象をなしていると考えられる。このことは，アンデスの形成期文化の問題に，かなり重要な意味をもつものであり，単なるスタイル（様式）の伝播だけでなくて，チャビン文化その物の広がりという事実を，どのように解釈すればよいかという，問題を提起することになるのであろう。チャビン=デ=ワンタルは，正にチャビン文化の中心であったとともに，チャビン猫神信仰の中心地でもあった。いわば，信仰のメッカとしてのチャビン=デ=ワンタルが形成されたのであり，アンデス各地からの巡礼的な人々の交流が行われたと解釈されるわけである。この巡礼的な交流は，勢い各地にチャビン様式を伝播させ，更に信仰のメッカからの物の移動をともなったのである。しかし，標高4000 m に近いアンデスの高地にあるチャビン=デ=ワンタルは，信仰のメッカとしても，また人的交流の場としても多くの障害が存在した。このためチャビン=デ=ワンタルの神殿と同じ様式をもった神殿が，各地に形成されていったと解釈できる面があるのである。いわば，山岳における宗教上の中心に対して，それと同じ意味をもつもの，つまり，チャビン=デ=ワンタルの神殿と同一ないし同等の構造やスタイルをもった宗教的中心が各地に形成され，この分散化した宗教的中心に各地からの巡礼的な人々の交流が行われたと考えられるのである。したがって，チャビン様式，チャビン文化の伝播は，メソアメリカのオルメカ様式の伝播よりは，はるかに強く，かつ直接的であったのである。例えば，モヘケ（Moxeke）やプングリ（Punguri）の神殿には，明確に猫科獣信仰の要素が認められ，神殿の壁に彫刻された猫科獣神の牙の表現は，アンデス山地から平地へおろされた信仰の中地心としての役割を担い，同時にチャビン猫神の崇拝の拠点としての役割を担ったものと解釈される[52]。とうもろこし農業とヤーマの飼育による牧畜的な経済を基盤として山岳に形成されたチャビン信仰は，こうしてアンデスの広い範囲に広がっていったのである。強力な宗教的観念，あるいは宗教的要素の伝播問題と芸術的要素，あるいは，芸術的様式の伝播問題との間には，かなり違った要因を想定せざるを得ない。特に，宗教的強制力が何によって斉されたのか，また，芸術的要素が伝播する要因は何であったのかを追求することが，中・南米の形成期文化の解明の手がかりとなり得るのである。

5. 結　　語

以上，新大陸文化史の中で，特に問題点の多い三項目について述べたが，編年問題については，複合した文化要素の系統立った再吟味，再整理がなされなければならないと考える。例えば，定住農耕村落の形成の問題は，前述の如く，ある意味で新大陸先コロンブス期の高文明形成地帯における中心的問題であるとともに，個々の定住農耕村落自体の解明が，更に重点的に行われなければならないのである。農耕村落は，人間の集団的生活の場であり，個々の住居の集合体でもあ

る。したがって，生活の場としての個々の住居地の調査が基本となり，更に，その住居内での生活が生態学的に追求されなければならないのである。つまり，多くの集落址の中から，いわゆるセツルメント・パターンが考古学的，民族学的，人類学的に導き出され，類型化された人間生活の生態が，個々の生活址から帰納された上で，ある一定時期の生活状況の復元が，具体的になされなければならないと考えるのである。このような具体的，実証的作業の集積の上に，集落のもつ経済的基盤，つまり，とうもろこし農耕という食糧生産形態が，どのように管理し，運営されていたかが判明するのであって，先コロンブス期の農耕村落の性格も，更に一層明確になってくるのである。

一口に定住農耕村落といっても，上記のように，なお解明されるべき多くの事項を含んでいる。古典期とか，後古典期とよばれる，いわゆる文明段階に到達した農耕村落の問題は，更に一層複雑な様相をもつものである。例えば，インカやマヤ，アステカといった王国的，帝国的領域内における農業社会や個々の農耕村落の複雑な生活体系は，考古学的資料だけでは解明されない多くの要因があるが，実証的，具体的な資料は，正に考古学的資料が，最も重要な意味をもつものであろう。したがって，このような資料は，古代文化の総体的解明のための関連諸科学にとっても重要な資料であることにかわりはない。古典期，後古典期の文明段階での過去の復元には，多くの科学の協同作業を必要とするものであり，物的資料を中心とする総合科学的方法と実行が，とられなければならないのである。このような地道な努力が，新大陸という広大な領域に対しての編年問題，時代区分問題を解決することになると考える。

また，形成期という学問的に重要かつ興味深い文化段階に対しては，正に中米では，オルメカ文化の問題があるのは，前述の通りである。オルメカ的要素の伝播や分布，チャビン文化の宗教的性格をもった広がり，これらについては，まだ，総合的な解明がなされていないといっても過言ではなかろう。物的資料は，発掘，その他によって集積されても，資料の科学的処理と総合科学的な解明は，関連諸科学の協同作業によって行われなければならないし，形成期問題は，正に，総合科学的解明をまっているといえる。

〔注〕

1) ここでいう核地帯アメリカという言葉は，メキシコから中央アメリカ及び南アメリカのコロンビア，エクアドル，ペルー，ボリビアの一部をふくむアンデス地帯と太平洋岸一帯を指し，文化的には，いわゆる形成期以降の高文明発生地帯を指すものである。

2) Sellards, E. H.: *Early Man in America.* University of Texas Press. Austin. 1962.

3) Franch, J. A.: *Manual de Arqueologia Americana.* pp. 59～80. Madrid. 1965.

4) Willey, G. R. and P. Phillips: *Method and Theory in American Archaeology.* University of Chicago Press. Chicago. 1958.

5) Rowe, J. H.: *Stages and Periods in Archaeological Inter-Pretation.* Southwestern Journal of Anthropology. vol. 18. pp. 40～54. Albuquerque. 1962.

6) Willey, G. R.: *An Introduction to American Archaeology.; volume one North and Middle*

America. pp. 29～72. New Jersey. 1966.

7) Cook, W. W. and R. K. Harris : *Hearths and Artifacts of Early Man near Lewisville, Texas and Associated Faunal Material.* Bulletin. vol. 28. pp. 7～97. Texas Archaeological and Paleontological Society. Abilene. 1957.

8) Cartes, G. F. : *Pleistocene Man at San Diego.* Johnes Hoppkins Press. Baltimore. 1957.

9) Shutler, R. : *Tule Spring Expedition.* Current Anthropology vol. 6. No. 1. pp. 110～111. Utrecht. 1965.

10) Krieger, A. D. : *Early Man in the New World. in* Prehistoric Man in the New World. (eds) J. P. Jennings and E. Norbeck. pp. 23～84. University of Chicago Press. Chicago. 1964.

11) フルーテッド=ポイントに関しては，多くの文献があるが，同尖頭石器の効果的な使用によって，狩猟の効率が極めて増大したと考えられる。

12) Wormington, H. N. : *Ancient Man in North America.* Popular Series No. 4. pp. 199～200. Denver Museum of Natural History. Denver. 1967.

13) De Terra, H., J. Romers, and T. D. Stewart : *Tepexpán Man.* Viking Fund Publications in Anthropology No. 11. New York. 1949.

14) Krieger, A. D. : op. cit. pp. 23～84. 1964.

15) Rouse, I. and J. M. Cruxent : *Further Comment on the Finds at El Jobo, Venezuela.* American Antiquity vol. 22. p. 412. Salt Lake. 1957.

16) Bell, R. E. : *Evidence of a Fluted Point Tradition in Ecuador.* American Antiquity vol. 26. pp. 103～106. Salt Lake. 1960.

17) Cardich, A. : *Los yacimientos de Lauricocha, nuevas interpretaciones de la prehistoria peruana.* Centro de Estudios Prehistoricos, "Studia Prehistoria" vol. I. Buenos Aires. 1958.

18) Menghin, O. F. A. : *Culturas precerámicas en Bolivia.* Runa. vol. 6, pp. 125～132. Buenos Aires. 1953～54.

19) Bird, J. B. : *Antiquity and Migrations of the Early Inhabitans of Patagonia.* Geographical Review. vol. 28. pp. 250～275. 1938.

20) Willey, G. R. : op. cit. pp. 27～30. 1966.

21) 旧大陸の後期旧石器時代は，ヴュルム氷河の終末頃を想定することができよう。しかし，新大陸の尖頭石器は，はるかにこれよりは，後代のものである。

22) Mac Neish, R. S. : *Preliminary Archaeological Investigations in the Sierra de Tamaulipas, Mexico.* Transactions. vol. 48. Pt. 6. American Philosophical Society. Philadelphia. 1958.

23) ここでいう石臼，石杵は，Metate, Mano を意味する。

24) Estrada, E. : *Las culturas pre-clasicas, formativas o arcaicas del Ecuador.* Museo Victor Emilio Estrada publicaciones No. 5. Guayaquil. 1958.

25) Evans, C., B. Meggers and. E. Estrada. : *Cultura Valdivia.* Museo Victor Emilio Estrada. Publicaciones No. 6. Guayaquil. 1959.

26) Vaillant, G. C. : *Excavations at El Arbolillo.* Anthropological Papers. vol. 35. Pt. 2. American Museum of Natural History. New York. 1935.

27) Vaillant, G. C. : *Excavations at Zacatenco.* Anthropological Papers. vol. 32. Pt. 1. American Museum of Natural History. New York. 1930.

28) Piña Chán, R. : *Tlatilco Investigaciones, Nos. 1～2.* Instituto Nacional de Antropologia e Historia. Mexico. 1958.

29) Cummings, B. C. : *Cuicuilco and the Archaic Culture of Mexico.* University of Arizona Bulletin vol. 4. No. 8. Tucson. 1933.

30) Drucker, P., R. F. Heizer and R. J. Squier : *Excavations at La Venta, Tabasco 1955.* Bureau of American Ethnology Bulletin 170. Smithsonian Institution. Washington. 1959.

31) Stirling, M. W. : *An Initial Series from Tres Zapotes, Vera Cruz, Mexico.* Contributed Technical Papers, Mexican Archaeology Series vol. 1. National Geographic Society, Washington. 1940.

32) Bird, J. B. : *Preceramic Cultures in Chicama and Virú. in* A Reappraisal of Peruvian Archaeology pp. 21～28. Memoirs of the Society for American Archaeology No. 4. New York. 1948.

33) Tello, J. C. : *Discovery of the Chavín Culture in Peru.* American Antiquity. vol. 9. pp. 135～160, 1943.

34) Izumi, S. and T. Sono : *Excavations at Kotosh, Peru.* Tokyo. 1963.

35) Marquina, I. : *Arquitectura Prehispanica.* Memorias del Instituto Nacional de Antropologia e Historia, No. 1. Mexico. 1951.

36) Caso, A. : *New World Culture History, Middle America. in* Anthropology Today. A. L. Kroeber, (ed.) pp. 226～237. University of Chicago Press. Chicago. 1953.

37) Willey, G. R. : op. cit. pp. 78～175. 1966.

38) Doig, F. K. : *Arqueologia Peruana.* pp. 291～329. Lima. 1971.

39) Kroeber, A. L. : *Paracas Cavernas and Chavín.* University of California Publications in American Archaeology and Ethnology vol. 40. No. 8. pp. 313～348. Los Angeles and Berkelay. 1953.

40) Kroeber, A. L. : ibid. 1953.

41) Bennett, W. C. : *Excavations at Tiahuanaco.* Anthropological Papers, American Museum of Natural History, vol. 34. pp. 359～494. New York. 1934.

42) Mason J. A. : *The Ancient Civilizations of Peru.* Penguin Books. pp. 88～106. London. 1957.

43) Morley, S. G. : *The Ancient Maya. 3rd. ed.* Stanford University Press. Palo Alto. 1956.

44) Doig, F. K. : op. cit. pp. 481～617. 1971.

45) Sanders, W. T. and J. J. Marino : *New World Prehistory; Archaealogy of the American Indian.* New Jersey. 1970.

46) 新大陸の農耕問題に関しては，多くの文献があるので，特に次のものをあげておく。Mac Neish, R. S. : *Ancient Mesoamerican Civilization.* Science vol. 143. 1964. Saner, C. O. : *Age and Area of American Cultivated Plants.* Proceedings 33rd. International Congress of Americanists. vol. 1. pp. 215～229. San José. 1959.

47) Fuente, de Beatriz : *El Arte Olmeca.* Artes de Mexico No. 154. Mexico. 1972.

48) Willey, G. R. : op. cit. pp. 93～175. 1966.

49) Covarrubias, M. : *Indian Art of Mexico and Central America.* Alfred A. Knopf. Inc. New York. 1957.

50) Drücker, P. : *La Venta, Tabasco, A Study of Olmec Ceramic and Art.* Bureau of American Ethnology Bulletin 153. Washington. 1952.

51) Doig, F. K. : op. cit. pp. 155～266. 1971.

52) Tello, J. C. : *Arqueologia del Valle de Casma, Culturas; Chavin, Santa o Huaylas Yunga y Sub-Chimu.* pp. 3～66. Publicacion Antropologica del Archivo "Julio. C. Tello", De la Universidad Nacional Mayor de San Marcos. Lima. 1956.